

聾学校小学部低学年での協同学習

－看図アプローチによる作文指導－

田中瑞穂（北海道札幌聾学校）・石田ゆき（日本医療大学）
鹿内信善（福岡女学院大学）

キーワード：聴覚障害、国語科、日本手話、作文、看図アプローチ

1. はじめに

日本手話もビジュアル・テキストも取り入れた幼稚部・小学部・中学部の一貫した授業システムを聴覚特別支援学校（以下、聾学校）でつくりたい。本研究では、日本手話や絵図・写真等のビジュアルテキストをメディアとした、聾学校小学部低学年国語科の授業を「協同学習」、「看図作文」の切り口から報告する。

2. 研究内容・方法

(1) 研究内容

聾学校小学部1・2年生クラスでの国語科授業記録ビデオから児童の反応や特徴的な行動がみられた場面等を抽出する。それによって、聴覚に障害のある児童の看図作文への取り組み、協同学習への構えについて報告する。

(2) 研究方法

- ①ビデオに記録した小学部1・2年生の国語科授業を分析していく。
- ②ビデオ記録から、児童の反応や活動の特徴を整理・検討・考察する。

3. 授業記録の概要

プロフィール：研究開始時、

A児（小1）感音性難聴：両耳平均聴力レベル90dBHL。両親、兄と弟は聴者。
B児（小2）感音性難聴：両耳平均聴力レベル90dBHL。両親は聴者。兄と弟は聾児。

1・2年生の複式学級。1年生の国語「しらせたいな、みせたいな」、2年生の国語「見たこと、かんじたこと」の単元に位置づけ、異学年同内容で、国語科看図作文の授業を行った。今回用いたのは、図1の鹿内(2014)のオリジナル絵図である。

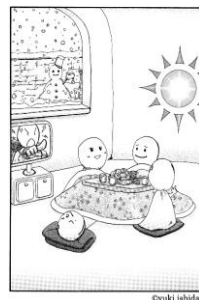


図1

(1) 協同学習が成立した場面

図1を見て、どの季節か話し合った。A児は一貫して「春」と主張し、「雪」には触れなかった。B児と教師が、丁寧に図1にかかれたものを挙げて根拠を示した。ついに、A児が「雪」

と発言した。それを受けてB児が「ぼくたち同じだ。」と発言した場面である。B児は、A児が自分の意見に拘泥していたことを責めずに、A児が意見を修正したこと、同意に至ったことを認めた。B児の言動は、協同学習における、友だちと良好な関係を築こうとする姿勢の発現として評価される(写真1)。



写真1

(2) ビジュアルリテラシーの発露がみられた場面

B児が、図1中の顔面のみえないてるてるぼうずの右側頭部をみて、同じように文字があるのではないかと推測した。また、壁の穴をみつけ、「ねずみの巣」だと発言したり、屋外の雪だるまが解けているので「冬の終わりころ」だと発言したりした。このことから児童の絵図を詳細に読み解く力を知ることができた。(写真2)。



写真2

(3) 書く活動の成功体験

A児は、自分の思いを文に書き表すことができた(資料1)。B児も、自力で長い文章を書くことができた。どちらの児童も書く活動に意欲的に取り組むことができた。「看図作文」の授業を通じて、楽しく作文を書く喜びを享受してもらいたいという目標は達成できたと考える。

4. まとめと今後の課題

日本手話環境では、児童同士が十全な話し合いができるため協同学習が成立した。また、児童が詳細に絵図を読み解いたことから、児童の基本的なビジュアルリテラシーをとらえることができた。児童たちは、書く活動に意欲的に取り組むことができた。今後も「看図作文」の授業を継続することで、児童の書く活動の成功体験を積む研究を報告したい。

注：児童の写真掲載については、保護者の許諾を得ている。日本手話では、表情が言語機能をもつので、写真のモザイク処理をしないことも保護者の許諾済みである。

資料1

「おとうとのゆめ」
てるてるぼうずのおとうとは、スーパーマンになったゆめを見えています。おとうとは、スーパーマンが、大きいです。だから、とてもたのしいきもちです。ゆめの中で、おとうとのからだは、きんにくもりもりになって、すごくかっこよくなっています。おとうとは、かっこよくなって、すごくうれしいです。